HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	共生型事業から生まれる新たなちいきづくり
Author(s)	大原, 裕介
Description	シンポジウム: 共生型福祉事業と北のまちづくり : 誰もが、ともに生きられる北海道のために. 基調講演
Citation	年報 公共政策学, 6, 15-24
Issue Date	2012-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51925
Type	other
File Information	APPS6_005.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

■ 基調講演

「共生型事業から生まれる新たなちいきづくり」

NPO 法人当別町青少年活動センターゆうゆう24　理事長
大原　裕介

当別町とゆうゆう24の取組の経緯

NPO 法人当別町青少年活動センターゆうゆう24理事長の大原です。当別町で共生型事業を行っており、今 2 拠点を運営しています。その簡単な実践報告と、この秋もう 1 ヵ所共生型の拠点を始めるので、今後の展開について、最後にまとめとして、僕なりに共生型事業の整理させていただいたのでお話いたします。

当別町はあまり知られていない町です。僕も大学は当別町にありますが、大学に通う際に当別町は札幌の隣にあると初めて知りました。人口 1 万8,000人の小さな町です。北海道医療大学があり、だいたい教職員合わせて2,500名くらいが在籍しています。医療系の専門福祉大学で、歯学部、薬学部、看護学部、臨床福祉学部という 4 つの学部学科があります。そして、大学に隣接して1,000人の学生が当別町で 1 人暮らしをしています。ですから、当別町は人口の約 5%近くが学生という特殊な町です。

平成14年度に大学のボランティアセンターということで、町から家賃補助をいただき、町内の空き店舗を借りました。また、大学からはこの建物の改修費を助成していただき、大学と町が協働して町なかの学生の活動拠点が作られました。

最初に、社協や行政などさまざまな関係団体の方から、当別町にどのような困りごとを持っている方がいるか聞いて回りました。その中で最も多かった意見が、障害を持つお子さんを持つ親、特にお母さんが、子どもを一時的に預かってもらえる場所がなく困っているということでした。親御さん達の介護負担が増加し、なかなか他の兄弟に時間を使えない、そして何より、親御さん達の社会生活の幅が狭まってしまっている。

そこで、学生企業ということで、1 時間400円で障害のあるお子さん達を預かる事業を開始しました。しかし、初年度の実績はたった46名で、学生がやるサービスなのでなかなか保護者の方々から信頼を得ることができませんでした。

2 年目、3 年目以降は、親御さんと一緒に学習会を開催したり、参観日のように預かっている様子を見てもらったり、夏休み、冬休みは 1 日500円で、午前中はプールに連れて行き、その後バーベキューをやって、夜は公園という500円では考えられないサービスを打ち出して、親の心をつかみました。

3 年目以降になると、近隣の札幌市や江別市からも要請があって学生を派遣したり、レスパイトで預かるだけではなく、外出支援をやってほしいということもありました。利用者の実績も512名になり、ちょうど僕自身も大学院の卒業の年を迎

えました。町からは3年間の家賃助成がありましたが、その後は自立するように前もって言われていたこともあって、平成17年に当時の支援費制度の児童デイ・児童居宅サービスを開始しました。

平成17年の開所以降実施している事業は、児童デイサービス、地域生活支援事業、居宅介護、相談支援、就労支援と、居住型のサービス以外は自立支援法に基づく事業をほとんど実施しています。その他、高齢者や子どもなど、町の中でいろいろな困りごとを持った方々を支えてきました。障害のある子どもだけを対象とするのではなく、高齢者のレスパイトや、冠婚葬祭にヘルパーを派遣できないので学生を行かせられないかということに対しても、1時間400円で請け負い、共生型のレスパイトサービスのような形を実施していました。NPO法人設立後も子育て支援事業、介護予防事業、介護保険対象外生活支援事業、福祉教育事業として、引き続き学生のときにしていたボランティア活動を事業化しています。

拠点としては、今秋できる拠点を含めると、当別町に5ヵ所、江別市に2ヵ所、夕張市に1ヵ所の8拠点を運営しています。常勤スタッフは25名です。僕は今年32歳になりますが、僕を筆頭に22歳までおり、医療大の卒業生や近隣の大学の卒業生など、各世代の新卒者を採用しています。20代の職員が多い、かなり若いNPO法人です。

当別町地域福祉ターミナルにおける実践

今日は2ヵ所の共生型事業の実践報告をさせていただきます。

1ヵ所目が「当別町共生型地域福祉ターミナル」です。下に「当別町ボランティアセンター」とも書いています。田西会館の隣にあり、NPO法人ゆうゆう24と社会福祉協議会のボランティアセンターが一緒の事務所に入り、コーディネーターが常駐しています。

当別町の地域福祉計画では、実施計画の1番目に、住民の福祉的な情報、教育の情報、ボランティアの情報が一元化できるような拠点作りが必要だということが置かれました。ちょうどそのとき、共生型の基盤整備事業があることを知り、町の中に拠点を作り、社協とNPO法人が一緒にコーディネートしたらいいのではないかということで、今まで点在していた社協とNPO法人のボランティア情報や福祉サービスの情報を一元化することに取り組みました。もともと役所の中にあった社協のボランティアセンターは地域福祉ターミナルに移り、社協のボランディアコーディネーターとうちの学生ボランティアコーディネーターが一緒の事務所で机を並べることになりました。

これはかなりの実践・実証効果がありました。例えば、今まではボランティア情報が来ると、電話で何往復かやりとりしてようやく活動に結びつけられていたのが、ターミナルに来た時点で、ワンストップで2つの団体で協議できるのです。ボランティアをしたい人がどういうことをしたくて、どういうことを望んで、どういうことをその人自身得ようとしているのかということを、その場で社協とNPOの職員がアセスメントすることが

できます。そしてお互いに持っているボランティア資源をその場でつなげて、早いときにはすぐに実施できます。従来は、関係機関の間でやりとりをしていると、2、3 日後に行ったか行かないかわからないといったような無責任な状況にしばしばなってしまっていました。その意味で、ボランティアセンターを一元化したのは大きかったと思います。ボランティアをする人にとっても、ボランティアを募集する人にとっても、活動しやすい場所を目指しています。

ボランティアの多くは高齢の方が多く、特に65歳以上の元気な女性、80代までの方がいますが、その方々がボランティア活動をすることで、介護予防につながります。

介護予防のためにボランティアという形で、高齢者のボランティア活動を介護予防推進事業として実施しています。ボランティアを受ける側もする側もメリットのある関係でできるボランティア活動にしましょうということで、町から地域支援事業交付金をいただき、コーディネートしています。

高齢者に対してボランティアをすることでの効果測定等のアンケートを実施すると、「笑うことが増えた」、「人と接して話すことが増えた」という結果が出ています。機材を使って筋トレをやったり、計算問題をやる介護予防よりも、日常生活の中で身体を動かしたり頭を使ったりする方がずっと有意義な介護予防だと思います。介護予防というとときどき怒る方がいますが、そうやって怒るのも介護予防になります。役割を持ち、感情を持ち、生きがいを持つことが介護予防で、「筋トレをやっても生きがいは持てないでしょ」と言うと、「そうだなあ」と言われます。だから、生きがいを持ちましょう、役割を持ちましょう、まだまだ元気じゃないですかということを、町の中で日常的にやりとりしています。

ボランティアは商工会とも連携しています。商工会が事務局となって、町内の40数店舗が加盟する「とうべつポイントカード会」があります。燃料小売店、ガソリンスタンドやクリーニング業、カラオケボックス、アパート業とありとあらゆる業者が加盟しており、3 万5,000円の買い物をすると500円のキックバックがあります。そこにボランティア活動をすることで、1 時間ごとに 2 ポイント付与される仕組みを提案しました。この仕組みによって、間接的に当別町の経済活性化に寄与することができます。初めは 6 割近い方々が、私達は無償奉仕でやっているので、何かの見返りは期待していないと反対しましたが、みなさんの活動がこの町を元気にし、この町を豊かにしていくと説得しました。商工会の方々にとってメリットのある取り組みを提案すると、商工会の方々も、ボランティア活動を知ろうとしたり、認めようとしたりします。一方的に福祉や障害者のことをわかってほしいと言ってもわからないので、いかにメリットのあるところに僕らが提案していくか、ということが重要です。

ポイントの仕組みは、次のようなものです。まず、ボランティア活動の代表者に、今日は何人で何時間やる予定という

ことでターミナルに来てもらいます。そしてボランティアコインと発行券を渡し、代表者の方にボランティア活動をやった後に各メンバーに配ってもらいます。それを個人でターミナルに来てもらってポイントをつけます。ポイントを刻印できる機械はターミナルにしか置かず、ターミナルに人が集まる仕組みにしています。さらに、ポイントは500円券になるだけではなく、年に数回ガチャポンとくじ引き大会を開催しています。年末はプラズマテレビが当たったりかなり豪華で、多い人だと200枚くらい貯めてきたりします。そうやって商工会と連携しています。

商工会とのポイントでもう一つ特徴的なのは医療大学との連携で、学生のボランティア活動や学生の実習にポイントが付くようにしました。これは、学生が商店街で買い物をしたり、飲食したりするようになるので、商工会の方に喜ばれました。なかには、家賃が引かれたりするので必死にボランティアをする学生もいました。

地域福祉ターミナルは、事務所だけでなくフリースペースもあります。最初、このフリースペースを無料にするか有料にするのかで住民と議論になり、住民は、お金もないのに無料にしていいのかと言ってくれましたが、無料にしました。

また、どんな団体でも使えることにしました。だいたいこういうところは、福祉関係団体や社協に登録している団体しか使えないなど、使える団体を限っていることが多く、福祉の人が福祉を狭めてしまう傾向にありますが、そうではなく、僕らは誰でも使っていいとしました。そうすると、今まで出会うことのなかった方々の間に交流が生まれます。例えば、おばあちゃんが日本舞踊を踊っているところに、たまたま子育てのお母さん方が来て、交流が生まれました。また、学校に嫌気がさしてスタッフのところに来て愚痴を言っていた女の子達が、元大工のおじいちゃんが作った仕掛け玩具を楽しんで、このおじいちゃんとこの女の子達の間に交流が芽生えました。このおじいちゃんは、次はまたおもしろいのを作って来ると意気込んで、それが生きがいになっています。このターミナルまで歩いて通うのも運動になります。こういう出会いは、「偶然という名の必然」だと思います。これらの出会いは別に仕組まれたわけではない偶然の出会いですが、地域の中にそもそもあった必然ではないかと思っています。

ボランティアの方が来たときに、入口で子ども達が興味を持って手を携えて交流をしたり、子育てサークルのお母さん達と小学生の交流があります。ダウン症の男の子と学生と高齢者がお食事会のときにお手伝いで来ます。囲碁打ちの相手を探していたおじいちゃんが相手を見つけたものの、見事に負けてしまって落ち込んでしまったのですが、そのおじいちゃんと、大人なんてたいしたことないよと言っているちょっと生意気な子が対局すると、おじいちゃんが勝って、その子はこのおじいちゃんのことを師匠と呼んでいます。

僕の中では、おじいちゃんは高齢者のデイサービスに行ったりすると、1人で囲碁を打っているイメージがあります。

一緒にやろうよと話しかけると、うるさい、あっち行けと言われます。高齢者デイという場所にいるから、おじいちゃんは福祉のサービス受益者になっているけれど、この地域福祉ターミナルにいると、子どもの指導員になれます。そこにケアスタッフがいればいいと思います。いかに日常生活と切り離さないようにケア介護していくかということも、共生型ケアでは重要なことではないかと思います。ただケアを組み合わせるのではなく、受ける側もケアする側もそれを見る住民側も違和感がないように、どれだけケアを日常生活の中にマッチさせるかが大事です。

日中一時支援の中で、地域貢献をしようと取り組みを作って、子ども達にも参加してもらっています。中度の身体障害で、犬の散歩をできなくなったことを悩んでいた方から犬の散歩のボランティアの依頼がありました。そこで、自立支援法によるサービスの実施中に、子どもの支援で子ども達が学生と一緒に犬の散歩をしました。

当別町共生型地域オープンサロン：ガーデンの取り組み

もう一つの拠点について、VTR を見ていただければと思います。

＜VTR＞

子どもから高齢者までが集うカフェを取材しました。

石狩の当別町にあるカフェです。障害のある若者が働いています。地元のNPO が障害者の働く場の確保と地域の人達の交流の拠点にしようと、2 年前から運営しています。カフェの一角には駄菓子屋があります。店員は近所のお年寄り30人が交代で務めます。

ここで、さまざまな交流が生まれています。夕方になると、学校帰りの子ども達がやって来ます。子ども達とは顔見知り。買い物の後、一緒に遊ぶようになりました。お年寄りはカフェで働く若者のサポートも始めています。休み時間に雑談をしたり、仕事のアドバイスをしたりしています。

カフェでの交流が思わぬ発展を見せました。弾いているのは大正琴。お年寄りの誘いで始めました。自宅とカフェの往復だけだった生活に、変化が生まれました。習い始めて 1 年半余り。今では月に 1 回は地域の集会や老人ホームなどに出向き、演奏会を開くまでになりました。

何もなかった土地につくられたカフェ。子どもからお年寄りまでが集い、支え合う場になっています。

大正琴は、僕らに全く相談もなく、あの方々が全部大正琴を仕切り、発表会も自分達で発表する場を見つけて交渉に行って、障害者と一緒にポスターを作って人を集めました。そういうことを大事にしています。僕は住民ソーシャルワーカーと呼んでいますが、町の中に住民のソーシャルワーカーをどれだけ増やすかということです。

2 カ所目の「共生型地域オープンサロン：ガーデン」では、駄菓子屋とドーナ

ツ屋と喫茶店をやっていますが、VTRには出ませんでしたが、昼は法人自身が食事を作っているのではなく、コミュニティレストランのような形で住民に作ってもらっています。「一日コックさん」という事業で、何を作るか、食数をどうするか、メニューをどうするかを住民の方が決めて、一日コックをしてもらっています。こうしたことは、いろいろな地域で取り組んでいますが、うちでは、あえて最初からプロの料理人にも入ってもらっています。例えば、近くで居酒屋をやっているけれど、ランチは提供していない方や、ランチをやっていてもなかなかお客さんが入らない方、新しくメニューを試したい方など。地域の中で競い合うのではなく、この事業で、子育て中のお母さん達や高齢者、学生などの町内での外食を増やし、お客さんをどんどん獲得してもらうのです。チラシを置いたり、PR するのもいいのです。現に、お客さんが増えた店もあります。ここにお客さんがとられたと言う方もいますが、そういう方には、そうではなく、ここでどんどん PR して、今まで顧客層としていなかった方々に来てもらえるようにしてもらいたい、と言います。そうやって共存し合って町を活性化していかないと、この町自体どんどんつぶれていってしまうのです。そのように料理店の方々とお話してご理解いただき、食べに来てくださったり、町のイベントがあれば誘ってくださって、スタッフにしていただいたり、いい関係が築けています。

一日コックさんで主婦の方々が500円で鮭ランチを出しました。また、町にパティシエをやっている若者がいて、自分で起業したいけれどなかなか資金や手法がわからないということだったので、うちに来てバレンタイン企画でケーキなどを出してほしいと依頼したら、喜んで来てくれました。もし、彼がその気であれば、障害福祉と組み合わせて、ケーキ屋さんも作れると思っています。こういう取り組みをすると、町の中にたくさんいい人材がいることがわかります。それと福祉をどう組み合わせて、社会資源として町の中に作っていくかはアイディア次第だと思います。

うちの障害を持ったスタッフが、自分達がどんなふうに働いているのかということを講演したときは、彼らのファンがたくさん町にいて、彼らがしゃべり終わった瞬間に、スタンディングオベーションのように拍手があります。町の中ではすっかり声をかけてもらえる存在になっていて、彼らが来ないとみなさん心配します。そういう関係性が築かれているのです。

学校との連携もしています。先輩から学ぶということで、学校からも招待いただきました。

コミュニティ農園づくりと高齢者就労支援への挑戦

新たな事業ということで、当別町にコミュニティ農園をつくろうとしています。ようやく確認申請が下りて、来週の月曜日から工事に入ります。町から1,000坪の土地を借り、そんなに大きな畑ではないのですが、畑を作って農園と

します。畑の隣には、一日コックで知り合った、ホテルのレストランの元料理長を料理長として招き、本格的な和食レストランをやります。厨房は大きくして、地域の方が集えるように料理教室も実施します。レストランと農園では、障害者に就労支援で働いてもらいます。小学校と保育所の農園も隣接しており、子ども達と障害者の交流にも取り組みたいと考えています。

さらに、新たな挑戦として、高齢者の就労支援にもチャレンジしたいと思っています。なぜ自立支援法に就労支援があるのに、高齢者には就労支援と移動支援がないのか、ずっと引っかかっていました。そこで、せっかくの機会なので作ってみようということで、今いろいろ準備しています。農業者から技術提供を受けて、農作業従事者と雇用される障害者補助支援を高齢者が行うもので、障害者補助を担っていただくことを主にしています。

それに付随して、当別町における団塊世代が研究員となった地域総合ケア及び高齢者就労支援の開発研究モデル事業を考えています。地域総合ケアは、私達が、学生時代に1時間400円でいろいろな方の支援をするということをやっていました。それを少しプログラム編成を変えて、1時間500円で制度外サービスを行い、町の困りごとをなんでも受け止める。例えば、介護保険ではなかなか見られない見守りのサービス、買い物サービス、院内介助などを1時間500円で受けるというものです。サービスにつなげるものは、ケアマネや包括と連携します。当初、それは僕らの職員が空いた時間でやっていたが、なかなかままならないので、住民を40人くらい集めて自分達で養成プログラムを作り、その方々にパーソナルアシスタントとして登録してもらい、住民サービスをやってもらうこととしました。

また、高齢者が介護状態になっても働くことができる就労をどのように組み立てていけばいいのかということで、高齢者就労支援のフレーム開発、地域住民福祉的相互システムの開発を、地域に出る機会の少ない団塊世代の人にやってもらうこととしています。今まで勤めていた専門的なことをそれぞれ活かしてもらい、どうすれば高齢者が働けるのか、福祉サービスがどんどん厳しくなっていく中で、住民同士どういうことがあればいいサービスになっていくのかを研究してもらいます。団塊世代の方だけでは難しいことがあるので、ゆうゆうと社会福祉協議会が事務局を担い、さらに当別の20団体近くが研究サポーターとして支えるものです。

事業は2年プランで、2年後には自ら研究したことをもとに、NPO法人を起業してもらいたいと思っています。団塊世代の方々に退職した後の人生として、社会貢献のNPOを運営していただきます。さらに、どうすれば高齢者の就労支援が作れるのかとか、どうすれば地域の総合ケアシステムが作れるのかというノウハウを、しっかり全国に普及させていくことも、団塊世代の方々に営業マンになってやっていただくという研究事業になっています。

もう一つ、新しく取り組みたいこととして大きなテーマとなっているのは、いかにファンド的にお金を集めるかということです。どうしても財源は限りがあります。いかに自分達の活動に賛同者を作って、企業、個人から資金を集めるか、さらにそれをファンド化していくのが大事だと思います。これも研究会で団塊世代の方々に研究してもらおうと思っています。

今、JA と話がついて、市場から外れた野菜をトン単位で買わせてもらうことになりました。それを最低賃金を払えるくらいの形で、高齢者や障害者の方々に荷詰めしてもらいます。そしてそれを北海道の中で卸すのではなく、全国の福祉事業所関係の授産や就労をやっているところ、さらには、今営業をかけているのですが、銀座の飲食店でお通しで出してもらえるようにするつもりです。事業のタイトルは、今考えているところです。この事業では、あなたの買ったお金が障害者や高齢者の賃金になり、さらにはあなた達の手で福祉サービスを作れますということになるのです。農作物を売って福祉サービスを作るという新しい展開に賛同いただけませんかということです。同じ野菜を買うなら何か自分が貢献しているという感覚で買ってもらった方が気持ちがいいと思います。そうすれば、農家の人も福祉に感謝します。当別は農業が一番の基幹産業ですが、だんだん高齢化で衰退しています。それを福祉で盛り上げ、農業の人とも関係性を作っていきたいと考えています。

そういうストーリーを作ることは大事だと思っています。売り上げは、研究会でやる 1 時間500円のサービスの原資にします。何百万単位というお金でも、住民の人達と一緒にサービスを作ってしまえばいいのです。サービスをやった分、行政から費用をもらうのではなく、住民との間でやりとりをするという形で、オリジナルの福祉サービスをやっていきたいと思っています。制度違反だとか面倒なことを言われずに、困っていることをみんなで話し合って決めていく、ということです。

今後の共生型事業と人材育成

今後の共生型事業は第 2 フェーズということで、これは私論ですが、中島専門官の話と合致するところが多いと思います。

共生型の福祉を通例として特別なものにするのか、ジェネラルなものにするのか。例えば、富山方式は、高齢者と障害者、子ども達が一緒にいる場所なので、かなりスペシャリティが高く、3障害プラス高齢者のケアと子どものケアもするので、専門的な福祉にしなければならない。それを目指すのか。それとも、一般住民が自由に出入りしてケアを行うことをジェネラルな福祉として理解していくのか。今日僕が説明したのは、ジェネラルに近いと思います。僕は、それらを混同させる形が目指すべき共生型の視点だと思っています。今は、多角的な視点があるはずなのに、事業をやる NPO や社福、行政、社協の立場で、ケアの効率性や経済性ばかりの解釈に留めてしまって

います。

例えば、「このゆびとーまれ」は極めていい実践だと思いますが、高齢型の介護ケアから入ったところなので、そこで専門性が必要な自閉症の子のケアができているかといえば、現場を見てそれは難しいと判断しました。住民の方にとって、いいサービスができているかも疑問があります。ただ、高齢者はとてもいい顔をしていて、高齢者にとってはいい場所なんだと思いました。高齢者のケアだけでなく、障害者、子どものケアも全部やっていくことを目指すのか、それともどこかにポイントを置いてやっていくのか。

ジェネラルな福祉をわかりやすく言うと、福祉を町の中で当たり前に存在する文化にすることだと思います。スペシャルは、3障害と高齢者、子どもを一度に見るので、専門職としてかなり高いスペシャリティが求められ、難しいです。それらがしっかり両輪で機能するようなフレームが必要だと思います。

スペシャルにする場合は、やはり人材育成だと思います。今のヘルパー2級の制度をもって、障害のケアをやりたいと来られても、経営者としては困るのです。共生型に応えるような専門的な資格をもう1度議論しなおすべきと思います。3障害、高齢者、子どもを別々にケアするのではなく、いかにこの人達を一緒にみることができるか。オールマイティーな専門家でなければ生き残っていけないのではないかと思っています。

また、共生型による起業も促そうと思っています。特に北海道の過疎地区は、単独での就労支援事業所の運営はなかなか成り立ちません。そこでは、いろいろなサービスのケア研修を積んだ若者や、ベテランの方々が町おこしも含めてやっていくことが必要だと思います。

ジェネラルにする場合は、住民に研修等のフレームが必要なのではないかと思います。先ほど中島専門官が、地域福祉コーディネーターが重要だと言っておられましたが、それは僕も共感できました。さらに言うと、地域福祉コーディネーターは相当な専門職でなければ難しいと懸念しています。ソーシャルアントレプレナーは、自分で社会資源を開発できて、さらにケア力を持っている人でなければ難しく、例えば、社協のコーディネーターが嘱託でやるようなレベルでは無理です。ケアもできて、さらに地域の中で社会資源を作っていくという両輪を持ってやらなければ難しいです。第2フェーズとして、そういう検証フレームをどう作っていくかが必要になります。

一つの例ですが、当別町でインフォーマル資源開発ということで、住民が障害者や子育て、高齢者の支援もできるようなパーソナルアシスタント27.5時間という研修プログラムを作ってくれました。ヘルパー3級くらいの資格取得をイメージしたものですが、カリキュラムが全然ニーズに合致していません。ですから、地域のニーズにマッチした、住民の長が認める資格の検証プログラムを各自治体で作っていく取り組みや、そういったことを自分達でやっていけるような仕組みをきちんと作っていく、それも団塊世代の方々に研究していただきたいと思いま

す。何が困っていて、何が必要で、制度の何がだめで、なんでこうなっているのかということを団塊世代の方が自ら考えて、作っていってもらいたいのです。子どももけが人も、退院してきた方も、全ての住民を包括的に包むような研修にできればいいと考えています。

僕が別に取り組んでいる事業なのですが、福祉現場で離職者が相次いでいるということと、なかなか高校生の中で大学に進学して福祉に取り組むというような、人材の確保と人材の育成が求められていないということがあります。このことも地域の悩みと同じ悩みだと思っています。

若手の福祉従事者がなぜ辞めるかということを整理すると、給料が安い、時間が長いなどがあり、これは辞める口実の枕詞のようなものです。しかし、若者に何度も話を聞いていくと、実際はケアに自信が持てないまま、信じられない速度でキャリアアップしていくことが負担となっていることがわかっています。3年目になったらいきなりエリアマネージャーを任されたり、任された人はとても不安そうな顔をしている。通常の会社で、課長、部長になるのが10年、15年くらいですが、福祉ではだいたい５年でそうなってしまう。30歳くらいになると、事業所全体を任される。頼れる上司もおらず、後輩やパートの人から罵られる。それでは、離職者も増える。

しかし、このキャリア構造の速度はどうにもならない。ですから、５年くらいでしっかり積み立てていけるような育成研修プログラムが必要なのです。例えば、１年目はケアの理念をしっかり学び、２年目は少しコーディネートする力を学んでいく。４年目、５年目ではコーチング。これは一番悩んでいる。どうやって自分の後輩に対して声をかければいいのか、指導すればいいのか。

福祉従事者だけでなく、地域の中でもそういう研修を地域ニーズと合わせて組み立てていく仕組みが必要だと思います。民生委員や福祉委員は、福祉に従事する若者と同じで、ケアに自信が持てないけれど、その職を与えられ、不安ながらにやっていると思います。役所に相談しても、役所もケアについて自信が持てないので、どうしたらいいかわからない。専門職の NPO や社協に相談してもわからず、地域の中でカオス状態になってしまっている。そういうことをきちんと見極めて検証をやっていく必要があるのではないかと思っています。